

博士論文（要約）

論文題目 平安朝文人論

氏 名 宋 哈

目次

凡例

序 平安朝における文人

- 一 中国学における文人について 二 平安朝文人の定義 三 白居易と平安朝文人
——文章の文芸性の発見 四 本論の視点 五 本論の構成

第一部 嵯峨朝における文人の端緒

- 第一章 『凌雲集』序に見る近代意識と文章経国 31
- 一 研究史俯瞰 二 嵯峨朝詩壇に見る「近代」 三 経国的文学観と「文章経国」

- 第二章 宮廷文学と詩人の私性 55
- 一 嵯峨朝詩壇における唯美的詩風 二 公的文華と私性の交渉 三 嵯峨朝における
隠逸思慕

- 第三章 菅原清公と音楽 74
- 一 嘯の字義 二 中世以前における嘯の受容 三 菅原清公「嘯賦」と音楽の賦
- 四 自序と本文——嵯峨朝詩壇における特質

第二部 詩文創作の意識と九・一〇世紀

- 第一章 承和年間以降における詩文兼作 93
- 一 小野篁の詩における自己規定 二 中唐における「記」と白居易
- 三 都良香と散文創作

- 第二章 菅原道真と書斎——学者の憂悶 117
- 一 居宅の記の具象性 二 閑適自得の空間 三 自適の喪失と交友 四 「書斎記」
と白居易の隠逸思想——内面への沈潜

- 第三章 紀長谷雄の自序 136
- 一 「記」に見る紀長谷雄の文飾 二 自序の叙述——集団から独立する個人
- 三 独吟の価値

- 第四章 兼明親王の隠遁——孤高と閑適 156
- 一 孤高の「兎裘賦」と賢人失志 二 「山亭起請」と「遠久良養生方」——具象化
される隠逸思慕 三 織りなされる孤高と閑適

- 第五章 和漢の散文の交渉 175

一行事に参集する民衆 二 邸宅に関する俯瞰的描写 三 漢文記録に見える古今集的自然表現の摂取 四 私的紀行としての『蜻蛉日記』初瀬詣の独自性

第三部 文人の憂愁

第一章 慶滋保胤の池亭 190

一 慶滋保胤と狂言綺語 二 保胤の述作と『白氏文集』受容 三 「池亭記」前半部に見る保胤の饒舌 四 「池亭記」と保胤の中隱思想

附章 「池亭記」から中世の二篇の「記」へ 224

一 源通親「擬香山模草堂記」 二 『方丈記』「擬香山模草堂記」に見る王朝漢文学の残照

第二章 大江匡衡の私性——八月十五夜の近江—— 233

一 「八月十五夜江州野亭対月言志」序の校異・語釈 二 表現面における匡衡序と他の文書の交渉 三 白居易と匡衡——都と辺土—— 四 マンネリズムと匡衡の個

第三章 大江匡房と『本朝文粹』 250

一 「秋日閑居賦」に見る『文選』『本朝文粹』受容 二 「遊女記」と大江以言「見遊女」序の関係性 三 「暮年記」——成功者の孤独——

終章 276

一 概括 二 平安朝文人と「記」の文学的伝統

初出稿一覧

博士学位論文「平安朝文人論」は、既に東京大学出版会と契約出版したため、その全文を公表できない。

博士論文を基にした刊行図書の書誌情報は左の通りである。

宋晗著『平安朝文人論』東京大学出版会、二〇二二年

ISBN 9784130860628

参考文献

各章の叙述の中で引用した先行研究を掲載順によって以下に列挙する。各章で重複引用した著作はできるだけ省略した。

序 平安朝における文人

- 中嶋隆蔵『中国の文人像』（研文出版、二〇〇六年）
- 荒井健編『中華文人の生活』（平凡社、一九九七年）
- 吉川幸次郎『陶淵明伝』（新潮社、一九五六年）
- 中田勇次郎『心花室集』（中田勇次郎著作集第七巻、一九八六年）
- 王蓉「宋代文人政治形成的歴史背景与意義」（『黒竜江史志』17、二〇一三年九月）
- 久木幸男『大学寮と古代儒教』（サイマル出版会、一九六八年）
- 古藤真平「文章科と紀伝道」（『古代学研究所研究紀要』3、一九九三年）
- 工藤重矩『平安朝律令社会の文学』（ぺりかん社、一九九三年）
- 渡辺秀夫「願文の世界——追善願文の哀傷類型と『文選』——」（『国文学解釈と鑑賞の研究』713、一九九〇年一〇月）
- 村上哲見『中国文人論』（汲古書院、一九九四年）
- 川合康三「中国における詩と文——中唐を中心に」（『日本文化研究所研究報告』29、一九九三年三月）
- 後藤昭雄『本朝漢詩文資料論』（勉誠出版、二〇一二年）
- 大曾根章介『王朝文学論攷』（岩波書店、一九九四年）
- 佐藤道生『句題詩論考——王朝漢詩とは何ぞや——』（勉誠出版、二〇一六年）
- 佐藤道生『平安後期日本漢文学の研究』（笠間書院、二〇〇三年）
- 菅野禮行『平安初期における日本漢詩の比較文学的研究』（大修館、一九八八年）
- 高兵兵「菅原道真詩文における「残菊」をめぐる——日中比較の視角から——」（『日本研究』32、二〇〇六年三月）
- 岡田正之『近江奈良朝の漢文学』（養徳社、一九四六年）
- 阿部秋生「第二章 中古」（『国文学解釈と鑑賞——文学精神の流れ』24・11、一九五九年一〇月）
- 大曾根章介『大曾根章介日本漢文学論集』第二巻（汲古書院、二〇〇〇年）

下定雅弘『白氏文集を読む』（勉誠社、一九九六年）

第一部 嵯峨朝における文人の端緒

第一章 『凌雲集』序に見る近代意識と文章経国

池田源太『奈良・平安時代の文化と宗教』（永田昌文堂、一九七七年）

小島憲之『上代日本文学与中国文学』下巻（塙書房、一九六四年）

池田源太『藤原時代の文化の性格』（『奈良大学紀要』7、一九五七年）

川口久雄『平安朝日本漢文学の研究』上巻（明治書院、一九五九年）

小島憲之『国風暗黒時代の文学 中上』（塙書房、一九七三年）

滝川幸司「勅撰集の編纂をめぐる——嵯峨朝に於ける「文章経国」の受容再論——」

（『アジア遊学』188、二〇一五年）

秋山虔・三好行雄編『シグマ新日本文学史』（文英堂、二〇〇〇年）

岡村繁「曹丕の『典論論文』について」（広島支那学研究所斯波六郎追悼集『支那学研究』24・25合併号、一九六〇年一〇月）

網裕次『中国中世文学研究——南斉永明時代を中心として——』（新樹社、一九六〇年）

後藤昭雄『平安朝漢文学論考』（補訂版 勉誠出版、二〇〇五年）

井実充史「文武朝の侍宴応詔詩——唐太宗朝御製・応詔詩との関わり——」（『国文学研究』115、一九九五年三月）

李宇玲『古代宫廷文学論』（勉誠社、二〇一一年）

古藤真平「八・九世紀文章生、文章得業生、秀才・進士試受験者一覧（稿）」（『国書逸文研究』24、一九九一年）

金原理『平安朝漢詩文の研究』（九州大学出版会、一九八一年）

藤原克己『菅原道真と平安朝漢文学』（東京大学出版会、二〇〇一年）

森野繁夫『六朝詩の研究』（第一学習社、一九七六年）

土屋聰『六朝寒門文人鮑照の研究』（汲古書院、二〇一四年）

興膳宏『中国の文学理論』（中国文学理論研究集成1 清文堂、二〇〇八年）

半谷芳文「勅撰三漢詩集考——序文と初唐の文章観」（『中古文学論攷』2、一九八三年三月）

第二章 宮廷文学と詩人の私性

小西甚一「古今集的表现の成立」(『日本学士院紀要』7-3、一九四九年一月)

神田喜一郎『日本文学における中国文学——日本填詞史話・上』(『神田喜一郎全集』

第六卷、同朋舎、一九八五年)

長谷部剛「唐代長短句詞「漁歌」の伝来——嵯峨朝文学と中唐の詩詞——」(『アジア遊学』188、二〇一五年九月)

大上正美「玄言詩の文学史における意義」(『立命館文学』563、二〇〇〇年二月)

小尾郊一『中国文学に現れたる自然と自然観——中世文学を中心として——』(岩波書店、一九六二年)

上田武「鮑照とその時代の陶淵明の受容」(『六朝学会報』3、二〇〇二年)

長谷部剛「羅振玉校録『王子安集佚文』について」(『関西大学中国学論集』29、二〇〇八年三月)

鈴木修次『漢魏詩の研究』(大修館書店、一九六七年)

亀山朗「建安詩人による送別の贈答詩について」(『日本中国学会報』42、一九八九年)

松浦友久『日本上代漢詩文論考』(松浦友久著作選Ⅲ 研文出版、二〇〇四年)

加藤周一『日本文学史序説』上(筑摩書房、一九七五年)

大曾根章介『大曾根章介日本漢文学論集』第一卷(汲古書院、一九九八年)

滝川幸司『天皇と文壇——平安前期の公的文学——』(和泉書院、二〇〇七年)

第三章 菅原清公と音楽

大島幸雄「清公卿伝」(『国書逸文研究』20、一九八六年)

波戸岡旭『宮廷詩人菅原道真——菅家文草『菅家後集』の世界』(笠間書院、二〇〇五年)

滝川幸司『菅原道真論』(塙書房、二〇一四年)

青木正児『中華名物考』(東洋文庫479 平凡社、一九八八年)

澤田瑞穂『中国の呪法』(平河出版社、一九八四年)

謝振発「六朝絵画における南京・西善橋墓出土「竹林七賢磚画」の史的位置」(『京都美学美術史学』2、二〇〇三年三月)

船津富彦「魏晋文学における嘯傲について」(『東洋文学研究』11、一九六三年)

李豊楙「嘯的伝説及其对文学的影響」(『中国古典小説研究専集』5、聯経出版事業公

司、一九八二年)

范子燁「論嘯——中国古典詩歌の一種音楽意象——為新郷晋孫登嘯台而作」(『新郷師範高等専科学校校報』20・1/21・1、二〇〇六年一月/二〇〇七年一月)

山崎誠『中世学問史の基底と展開』(和泉書院、一九九三年)

蔡仲徳『中国音楽美学史』(藍燈文化事業公司、一九九三年)

許結『賦体文学的文化闡釈』(中華書局、二〇〇五年)

上原尉暢「王褒「洞簫賦」における自然描写をめぐって」(『東北大学中国語学文学論集』16、二〇一一年十一月)

上原尉暢「王褒「洞簫賦」をめぐって——音楽描写を中心に——」(『集刊東洋学』107、二〇一二年)

中島千秋『文選(賦篇)上』(新釈漢文大系79、岩波書店、一九九七年)「解説」

蔭木英雄「滋野貞主・菅原清公小論(下)」——三勅撰詩集攷(二)——(『漢文教室』138、一九八一年)

マックス・ヴェーバー著・木全徳雄訳『儒教と道教』(名著翻訳叢書2、創文社、一九七五年)

第二部 詩文創作の意識と九・一〇世紀

第一章 承和年間以降における詩文兼作

玉井力「承和の変について」(『歴史学研究』286、一九六四年)

福井俊彦「承和の変についての一考察」(『日本歴史』260、一九七〇年)

坂上康俊『律令国家の転換と「日本」』(日本の歴史06 講談社学術文庫、二〇〇九年)

吉江崇『岩波講座日本歴史第四巻 古代四』(岩波書店、二〇一五年)

彌永貞三「菅原道真の前半生——とくに讃岐守時代を中心に——」(川崎庸之編『日本人物史大系第一巻 古代』朝倉書店、一九六一年)

長島一浩「東宮学士・文章博士春澄善繩について」(『政治経済史学』249、一九八七年)

渡辺直彦『日本古代官位制度の基礎的研究』(増訂版 吉川弘文館、一九七八年)

金子彦二郎「元白詩筆と筆・春道の詩」(『国語と国文学』29-2、一九五二年二月)

後藤昭雄『平安朝漢文文献の研究』(吉川弘文館、一九九三年)

藤野岩友「楚辞の近江奈良朝の文学に及ぼした影響」「平安朝の漢詩文に及ぼした楚辞

の影響」(『東洋研究』40・46、一九七七年四月・一九七七年五月)

門脇禎二『日本古代政治史論』(塙書房、一九八一年)

茂木信之「文人と隠逸」(荒井健編『中華文人の生活』平凡社、一九九四年)

卞孝萱『元稹年譜』(齊魯書社、一九八〇年)

川合康三『白楽天——官と隠のはざま——』(岩波新書 1228 岩波書店、二〇一〇年)

二宮俊博「洛陽時代の白居易——「狂」という自己意識について——」(『中国文学論集』10、一九八一年一月)

後藤昭雄「平安朝漢文学における憂愁の文学の系列」(『鹿児島県立短期大学紀要人文・社会科学篇』21、一九七一年二月)

川口久雄『平安朝日本漢文学史の研究』上卷(三訂版、明治書院、一九七五年)

太田次男『中唐文人考——韓愈・柳宗元・白居易——』(研文出版、一九九三年)

陳寅恪『元白詩箋証稿』(上海古典文学出版社、一九五八年)

松本肇『唐代文学の視点』(研究出版、二〇〇六年)

佐伯有清『伴善男』(人物叢書、吉川弘文館、一九七〇年)

後藤昭雄『平安朝漢文学史論考』(勉誠出版、二〇一一年)

丸山茂「白氏交遊録——元宗簡——」(日本大学文理学部人文科学研究『研究紀要』56、一九九八年)、「白氏交遊録——李建(上)(下)」(同61・62、二〇〇一年)

赤井益久「自注の文学——『元氏長慶集』を中心として——」(『中国古典研究』47、二〇〇二年一月)

島津忠夫『島津忠夫著作集』第二卷(和泉書院、二〇〇三年)

鈴木修次『唐代詩人論』下卷(鳳出版、一九七三年)

川合康三『終南山の変容——中唐文学論集——』(研文出版、一九九九年)

川合康三「中国詩史における白居易」(『中古文学』98、二〇一六年二月)

大曾根章介『王朝漢文学論攷』(岩波書店、一九九四年)

第二章 菅原道真と書齋——学者の憂悶——

焼山廣志「菅原道具「書齋記」と白居易「池上篇」との比較考察(その一)——白居易「池上篇並序」試読」(『国語国文研究』31、一九九五年二月)

高兵兵「菅原道真の住まいと白居易——平安京宣風坊邸と洛陽履道里邸」(『白居易研

究年報』6、二〇〇六年一月)

小西甚一『日本文藝史 II』(講談社、一九九三年)

齋藤希史「〈居〉の文学―六朝山水／隱逸文学への一視座」(『中国文学報』42、一九九〇年一〇月)

後藤昭雄『平安朝文人志』(吉川弘文館、一九九三年)

二宮美那子『池上篇並序』論―あわせて自適の空間を定義する幾つかの表現について―(『中国文学報』73、二〇〇七年四月)

第三章 紀長谷雄の自序

藏中スミ「紀長谷雄『競狩記』について」(『和漢比較文学叢書3』汲古書院、一九八六年)

後藤昭雄『平安朝文人志』(吉川弘文館、一九九三年)

渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』(勉誠出版、一九九一年)

土方洋一『日記の声域―平安朝の一人称言説―』(右文書院、二〇〇七年)

川合康三『中国の自伝文学』(創文社、一九九六年)

寥榮發「紀長谷雄の「詩言志」の宣言―「延喜以後詩序」を読み直す―」(『和漢比較文学』56、二〇一六年二月)

本間洋一『王朝漢文学表現論考』(和泉書院、二〇〇二年)

第四章 兼明親王の隱遁―孤高と閑適―

小野泰央『平安朝天曆期の文壇』(風間書房、二〇〇八年)

金原理『日本の古典と漢文学―和歌と漢文学・類書・大宰府と道真他―』(熊本出版文化会館、二〇〇九年)

村田年子「兼明親王の作品研究―本朝文粹収録作品を中心として―」(『平安文学研究』35、一九六五年一月)

太田次男『中唐文人考―韓愈・白居易・柳宗元―』(研文出版、一九九三年)

金原理『詩歌の表現―平安朝韻文攷―』(九州大学出版会、二〇〇〇年)

清宮剛「賢人失志の賦と道家思想」(『集刊東洋学』30、一九七三年一二月)

寥國棟「從「士不遇賦」到「歸去來」―試論兩漢辭賦對京城的趨附與偏離」(『國際

辭賦學學術研討會論文集』、一九九六年)

興膳宏『潘岳 陸機』(中国詩文選10 筑摩書房、一九七三年)

齋藤希史「謝靈運の山居——「居」の文学(二)——」(『中国文学報』61、二〇〇〇年)

松本肇『柳宗元研究』(創文社、二〇〇〇年)

後藤昭雄『本朝文粹抄四』(勉誠出版、二〇一五年)

沢崎久和「白居易の日常生活」(『白居易詩研究』研文出版、二〇一三年)

周健「論張衡の文学成就」(『暨南学報(哲学社会科学)』、一九八八年第三期)

許結「張衡「思玄賦」解読——兼論漢晋言志賦之承変」(『社会科学戦線』、一九八八年第六期)

第五章 和漢の散文の交渉

中野幸一『うつほ物語の研究』(武蔵野書院、一九八一年)

小関清明「初期の物語に於ける自然描写に就いての一考察」(『高知大学研究報告人文科学』2、一九五二年三月)

江戸英雄『うつほ物語の表現形成と享受』(勉誠出版、二〇〇八年)

伊藤博『蜻蛉日記研究序説』(『笠間書院、一九七六年)

三田村雅子「蜻蛉日記の物語」(『一冊の講座 蜻蛉日記』有精堂、一九八一年)

宮田京子『「かげろふ日記」の自然描写と物語——視覚、聴覚の視点から——』(『中古文』46、一九九〇年一二月)

小野泰央『平安朝天曆期の文壇』(風間書房、二〇〇八年)

大谷雅夫『歌と詩のあいだ——和漢比較文学論攷』(岩波書店、二〇〇八年)

伊東卓治「青蓮院藏表制集及び灌頂阿闍梨宣旨官牒の紙背文書について」(『美術研究』184、一九五六年三月)

第三部 平安朝後期漢文学における散文の定型性と固有性

第一章 慶滋保胤の池亭

小原仁『文人貴族の系譜』(吉川弘文館、一九八七年)

佐藤道生「大江匡房の官職・位階と文学」(日向一雅編『王朝文学と官職・位階』、平安文学と隣接諸学4、竹林舎、二〇〇八年)

- 小原仁『慶滋保胤』（人物叢書 286 吉川弘文館、二〇一六年）
- 小島孝之「狂言綺語」（『国文学 解釈と鑑賞』30-10、一九八五年九月）
- 後藤昭雄「慶滋保胤」（『岩波講座 日本文学と仏教』第一卷、岩波書店、一九九三年）
- 増田繁夫「詩歌は狂言綺語とする文学観」（『国語と国文学』79-9、二〇〇二年九月）
- 増田繁夫「慶滋保胤伝攷」（『国語国文』33-6、一九六四年六月）
- 後藤昭雄「延久三年「勸学会記」本文再考」（『成城国文学』28、二〇一二年三月）
- 角田文衛『王朝の映像』（東京堂出版、一九七〇年）
- 吉原浩人「慶滋保胤六波羅蜜寺供花会詩序訳註」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第1分冊』57、二〇一一年）
- 吉原浩人「慶滋保胤六波羅蜜寺供花会詩序考——勸学会詩序との関連において——」（『多元文化』1、二〇一二年三月）
- 花房英樹『白居易研究』（世界思想社、一九七一年）

附章 「池亭記」から中世の二篇の「記」

- 仁木夏美「源通親「擬香山模草堂記」新考」（『白居易研究年報』4、二〇〇三年）
- 品川和子『王朝文学論考』（武蔵野書院、二〇〇一年）
- 川口久雄「方丈記の先蹤文学の一資料——成實堂本作文大体所収源通親久我草堂記」（『金沢大学法文学部論集 文学編』7、一九六〇年二月）
- 久保田淳『藤原定家の時代』（岩波書店、一九九四年）

第二章 大江匡衡の私性——八月十五夜の近江——

- 北山円正「大江匡衡の八月十五夜の詩」（『神女大國文』24、二〇一三年三月）
- 後藤昭雄『大江匡衡』（人物叢書 242 吉川弘文館、二〇〇六年）
- 木戸裕子「江吏部集試注（一）」（『文献探究』36、一九九八年三月）
- 今浜通隆・三浦加奈子『江吏部集』全注釈（1）（『並木の里』55、二〇〇一年十二月）・『江吏部集』全注釈（2）——作品（上2）について其二（『並木の里』56、二〇〇二年六月）
- 木戸裕子「江吏部集」に見られる言語遊戲的表現について」（『語文研究』64、一九八七年十二月）

東野治之『日本古代木簡の研究』（塙書房、一九八三年）「平城宮木簡中の『葛氏方断簡』」

田坂順子編『扶桑集―校本と索引』（樺歌書房、一九八五年）

赤塚睦男「雅語「霧」―病気の比喩として」（『国語国文学研究』28、一九九二年五月）、
「病気の比喩「霧」についてのノート―本朝文粹等の用例」（『筑紫女学園短期大学紀要』28、一九九三年）

川口久雄『平安朝日本漢文学史の研究』下巻（明治書院、一九六一年）「大江匡衡と江吏部集」

第三章 大江匡房と『本朝文粹』

久曾神昇「原撰本本朝文粹と本能寺切」（『愛知大学文学論叢』42、一九七〇年三月）

本間洋一『本朝無題詩全注釈』第一～三卷（新典社、一九九二～一九九四年）

山崎誠『江都督納言願文集注解』（塙書房、二〇一〇年）

佐藤道生「大江匡房の官職・位階と文学」（日向一雅編『王朝文学と官職・位階 平安文学と隣接諸学4』竹林舎、二〇〇八年）

山岸徳平・竹内理三・家永三郎・大曾根章介注『古代政治社会思想』（日本思想大系8 岩波書店、一九九四年）

小峯和明『院政期文学論』（笠間書院、二〇〇六年）『遊女記』贅注」

佐藤道生・柳沢良一校注『和漢朗詠集 新撰朗詠集』（和歌文学大系47、明治書院、二〇一一年）

木本好信『平安朝官人と記録の研究——日記逸文にあらわれたる平安公卿の世界——』（おうふう、二〇〇〇年）

河北騰『今鏡全注釈』（笠間書院、二〇一三年）

本間洋一『王朝漢文学表現論考』（和泉書院、二〇〇二年）「大江匡房の漢詩」

吉原浩人「大江匡房と「記」の文学」（『国文学解釈と鑑賞』60-10、一九九五年一〇月）

山田尚子『中国故事受容論考——古代中世日本における継承と展開——』（勉誠出版、二〇〇九年）

終章

吉原浩人「大江匡房と「記」の文学」(『国文学解釈と鑑賞』60―10、一九九五年一〇月)
岑仲勉「白集醉吟先生伝存疑」(『歴史語言 研究所集刊』9、一九三七年)

論文の内容の要旨

論文の題目 平安朝文人論
氏 名 宋 吟

本論文の目的は平安朝の「文人」が漢詩文、とりわけ散文によっていかなる内面を表現していたのかを中国文学と比較対照しつつ通時的に分析し、平安朝文人の特質を明らかにすることである。本論文は「序 平安朝における文人」および「第一部 嵯峨朝における文人の端緒」「第二部 詩文創作の意識と九・一〇世紀」「第三部 文人の憂愁」の三部十二章からなる。

「序 平安朝における文人」では先行研究を整理しつつ、本論文の主題と手法をそれぞれ提示した。平安朝文人の定義と漢詩文の定型性である。

まず平安朝文人の定義について。平安朝漢文学研究では菅原道真・大江匡房といった漢詩文作者を「文人」と呼称するが、「文人」という人間類型の定義についての議論は十分に尽くされてこなかった。平安朝文人の定義は曖昧な状態にあるといってよい。本論文は平安朝全期を考察範囲に定め、通時的に文人の作品を考察するものである。平安朝文人の範疇に含められる漢詩文作者を確定する上で、平安朝文人に対する定義は、暫時的にはあるが、規定することが手続きとして必要となる。そこで序論では「文人」に関する中国学研究を概観することからはじめた。「文人」といえば、いわゆる詩文書画に代表される諸芸術に通じた高雅な人物、といったイメージがまず喚起される。このような文人像が元代以降のいわゆる「文人画」を製作した文人達に基づくものであることは吉川幸次郎ら先学諸氏によって指摘されている。ただ、「文人」に妥当する存在を中国史上に俯瞰的に検討した場合、必ずしも近世文人像がそれ以前の「文人」にそのままあてはまるものではない。文人即市井の人、というような通念は王維・蘇軾といった士大夫・読書人でありながらも「文人」と呼称される人物に適用されないのである。「文人」に含まれる人物は時代によってそれぞれの特徴を持つと考えられるけれども、その根幹には文芸に長けているということがつねに含意されているといえよう。よって本論文では井上進氏の視点をふまえて「文人」を政道を担う士大夫の一側面としてとらえ、文人とは各種公文書の執筆と職務としながら、他方では私的、あるいは文学的に読解しうる文章を創作する人物類型として定義する。中国の「文人」特に中唐の白居易から影響を受けた平安朝文人たちも基本的にはこのような定義が適用されるが、同時に平安朝社会に即した特徴を持つことが推定される。

次に漢詩文の定型性の評価である。平安朝漢文学の主な創作の場が作文会にあることはよく知られているが、天皇・撰関家の意を汲んで作られる詩文は往々にして定型的儀礼的

で個人の感興に乏しい点が注目されている。だが、平安朝漢文学の定型性を低く評価することに止まってよいのであろうか。序論では菅原道真の独詠と応製を対比し、用いられた技法が時に共通することから、固有性と定型性という二つの要素が平安朝漢文学にあると措定する。いわゆる月並みで決まり切った定型表現が、平安朝文人の個的な文学作品でいかに捉え直され、文人の個の表出に役立てられているのかを分析の手法とする。

第一部第一章『凌雲集』序に見る近代意識と文章経国は『凌雲集』成立に際してなぜ魏の文帝の『典論』『論文』の「文章経国は経国の大業」が勅撰集編纂の理念として選択されたのかを考察した。本章では文章経国思想に関する先行研究を整理し、嵯峨朝詩人は弘仁期に充溢する漢詩文創作の熱気に輪郭を与える言葉として文帝の「文章経国」を選択したことを検討した。

第一部第二章「宮廷文学と詩人の私性」は、嵯峨朝詩壇における個的な詩作と侍宴応制の詩作に共通する表現、すなわち六朝詩風の知巧的表現が看取されることに着目し、嵯峨朝詩壇は詩人の個的な主題・表現を制約した一面だけでなく、侍宴応制の集団的高揚感に埋没しがちな詩人に私性詠出の手法を提供する役割を担っていたことを明らかにした。

第一部第三章「菅原清公と音楽」は菅原道真の祖父である菅原清公の「嘯賦」を考察の対象とする。第一に、嘯が具体的にはどのような行為であるのかについて先行研究を整理し、あわせて奈良・平安朝漢詩における「嘯」の用例を検討し、「嘯」の持つ反俗性が平安朝中期の個人的な漢詩において十全に受容されたことを指摘した。平安朝における「嘯」受容の屈折点として清公の「嘯賦」が浮かび上がるのであり、上記の整理をふまえて「嘯賦」の表現を分析した。嵯峨朝では漢文学の集団性が顕著であり、詩人の個性は鮮明ではないといわれる。しかし、そのなかで清公は制作難易度の高い「賦」によって自らの趣味たる「嘯」を描いた。「嘯賦」が自序＋本文という同時代では珍しい形式を持つことに注目し、個性的な自序と唯美的な本文が相照応することによって作者の情感が立体的に表現される、という作品の特質を明らかにした。

第二部第一章「承和年間以降における詩文兼作」は文章道の地盤沈下が顕著となる仁明文徳兩朝に活躍した小野篁・都良香を対象に、嵯峨朝詩人とは異なる漢詩文創作の意識、すなわち詩文兼作、が文人に芽生えたことを考察した。第一に小野篁と『元白詩筆』の影響関係について「狂」という自己規定を切り口に分析し、小野篁が白詩風の個人的な感慨を表現していたことを確認した。第二に、白居易の「草堂記」などの散文作品が従来の「記」の公文書的性格を打破して個性的な作品に作り上げられていることに注目し、中唐においては古文運動の中心となった韓愈・柳宗元のみならず、古文運動と関わりのない白居易らも散文の変革に意を砕いていたことを指摘した。したがって平安朝中期漢文学における散文の変革は中唐文学とパラレルに進行していた一面があると措定される。だが平安朝文人

は『白氏文集』所収散文作品を受動的に受け取ったのではない。良香を例にとり、文章道の地盤沈下という局面に接して自発的に自己表現を開拓した結果として白居易の文学をモデルとして選び取ったことを考察した。

第二部第二章「菅原道真と書齋——学者の憂悶——」は菅原道真の「書齋記」を考察した。

従来の研究では「書齋記」の本文を素直に受け取り、その人物像を構築する読みが主流であったが、本章では人物像の構築をしばらく置き、「書齋記」に用いられた表現の型に注目した。菅原道真は、白居易の「草堂記」などといった閑居自適の居宅の記のパターンを取り入れつつ、それをずらして書齋にまつわる出来事（かつての勉学・弟子の不作法など）を叙述していることを明らかにした。平安朝漢文学における白居易散文の受容と応用は、「書齋記」に始まるといえる。

第二部第三章「紀長谷雄の自序」は紀長谷雄晩年の「延喜以後詩序」を考察した。第一に、長谷雄の漢文記録を分析して長谷雄の散文家としての力量を確認し、それが「延喜以後詩序」という傑作を生み出した基盤である可能性を提示した。第二に「延喜以後詩序」が中国文学における自序の文学的伝統から逸脱していることを明らかにした。

第二部第四章「兼明親王の隠遁——孤高と閑適——」は、従来の孤高の隠者という親王像が一面的であると考え、亀山隠棲後の諸篇を総体として把握することを試みた。兼明親王には左大臣免職事件に憤慨した「兎裘賦」だけでなく、白居易に倣って閑居自適を希求する「山亭起請」といった個人的な作品もあり、兼明親王が憂悶と自得を多彩なジャンルによって立体的に表現していたことを明らかにした。

第二部第五章「和漢の散文の交渉」は平安朝漢文学と和文学の交渉に注目し、十世紀における『うつほ物語』をはじめとする仮名散文と漢文記録が定型表現を一部共有していたことを考察した。

第三部第一章「慶滋保胤の池亭」は慶滋保胤の述作の分析を通じてその思想の実質を探った。第一に同時代の文人のなかで保胤の狂言綺語観が独特なものであり、文学と信仰を矛盾対立する関係であると保胤が認識していたことが、その文学の原動力であったことを指摘し、一般の文人が注目しないような白居易の作品を保胤が血肉化していたことを明らかにした。第二に「池亭記」および同時期の述作を分析し、執筆時の状況に応じてふさわしい思想（儒・仏のいずれか）をよりどころとしていたことを考察し、それが白居易の思想の特質を十全に学んだ結果であることを明らかにした。

附章「池亭記」から中世の二篇の「記」へは源通親の「擬香山模草堂記」、鴨長明の『方丈記』を分析し、両者に影響関係が見られないものの表現に通底する基盤があることに注目し、平安朝漢文学の「記」が自己表現の古典として中世に受容されていた可能性を考えた。

第三部第二章「大江匡衡の私性——八月十五夜の近江——」は大江匡衡の「八月十五夜江州野亭対月言志」序を考察した。匡衡は定型表現に習熟しており、公宴の場にふさわしい

文章を作ることによって長けていた文人であるが、個人的な詠作においては、断章取義的に理解されていた定型表現の原義に立ち返ることで個性的な作品を作ったことを明らかにした。

第三部第三章「大江匡房と」本朝文粹』は院政期漢文学における匡房の述作の意義を考察した。院政期文人は『和漢朗詠集』『本朝文粹』などに代表される平安朝中期漢文学を尊重していたが、その中で匡房は『本朝文粹』所収作品を体系的に模倣することによって独特な個性を有していたことを、紀長谷雄の「延喜以後詩序」を踏襲した「暮年記」を中心に明らかにした。

終章は上記三部を概括し、あわせて平安朝漢文学における散文の変遷史について記述した。中唐文学において文人の自己表現を託しうるジャンルが複数(序・伝・墓誌銘・記)存在するのに対し、十世紀から十二世紀にかけての日本では白居易散文学の咀嚼理解の結果、自己表現の散文ジャンルは「記」のみが重視された。白居易の散文学は平安朝にふさわしい形式で定着したのである。